

重要カレイ類の資源評価と管理技術に関する研究

(資源評価調査)

道根 淳

1. 研究目的

本県底びき網漁業の重要資源であるムシガレイ、ソウハチ、アカガレイの資源状況を把握し、科学的評価を行うとともに、資源の適切な保全と合理的かつ永続的利用を図るための提言を行うことを目的とする。

2. 研究方法

漁獲統計資料は当センターの漁獲統計システムにより抽出し、魚種別銘柄別漁獲量の集計を行った。また、市場調査ならび買い取り調査を実施し、調査当日の漁獲物の体長組成の推定、精密測定を実施した。さらに、これらの調査結果をもとに(独)水産総合研究センターおよび関係各府県の水産研究機関と協力し、魚種別の資源評価を行い、ABC(生物学的許容漁獲量)の推定を行った。

3. 研究結果

(1) 重要カレイ類の漁獲動向

図1に浜田、恵曇港を基地とする沖合底びき網漁業(2艘びき)における重要カレイ類3種の漁獲動向として1統当たり漁獲量の推移を示した。1990年代の漁獲動向はそれぞれ異なるが、2004年頃を境にカレイ類3種とも増加傾向に転じた。同図から、2000年代になり、カレイ類3種の資源水準は1990年代に比べ高くなっていることが伺える。2009年漁期の漁獲量は、ムシガレイが629トン、アカガレイが425トン、ソウハチが215トンであった。図2に浜田港を基地とする沖合底びき網漁業で漁獲されたムシガレイの全長組成を示した。近年漁獲の増減が大きい本種であるが、全長組成より2008年以降小型魚の加入があまり良好でないことが推測された。

(2) 結果の活用

(独)水産総合研究センター日本海区水産研究所、西海区水産研究所が開催する各プロ

ック資源評価会議に参加し、資源量、漁獲水準等の推定ならびに管理方策の提言を行った。

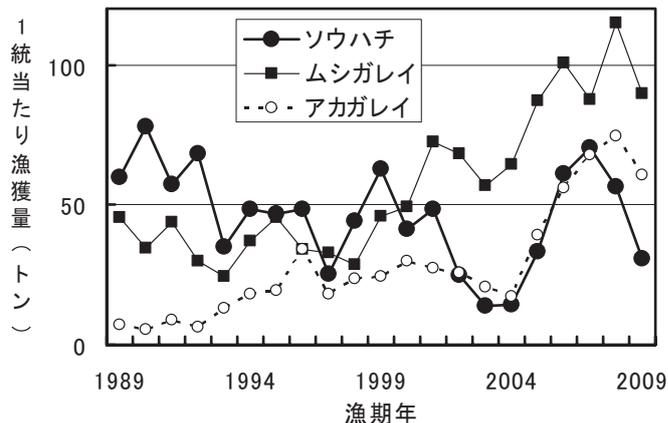


図1 浜田・恵曇港を基地とする沖合底びき網漁業(2艘びき)における重要カレイ類の漁獲動向

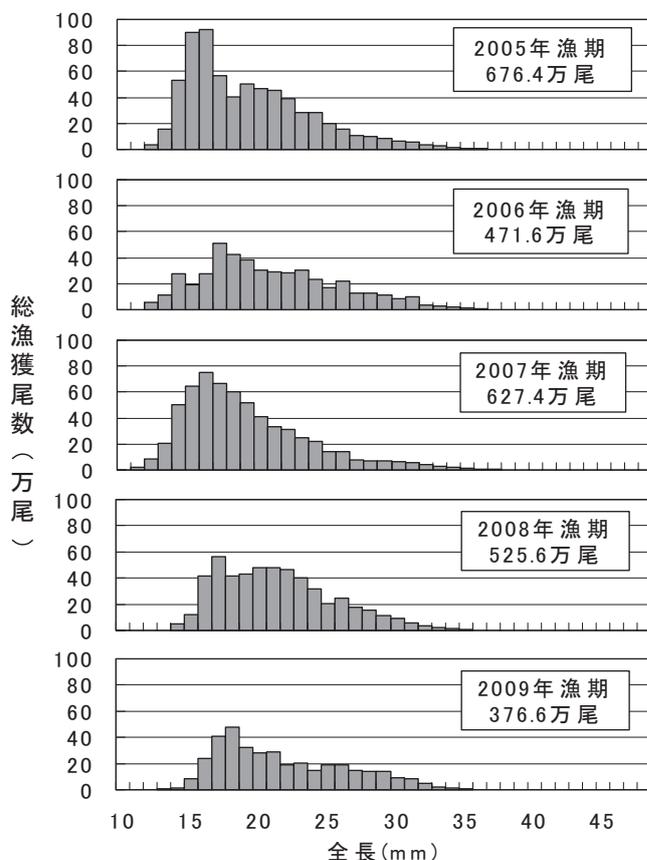


図2 浜田沖底で漁獲されたムシガレイの全長組成